

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



日本の医療の最も素晴らしいところ。それは「国民皆保険制度」の存在です。この制度が始まったのは1961年のこと。1955年頃は国民の3分の1にあたる3000万人が低所得のため無保険者であり、医療を受けられませんでした。今はこの制度があるから、誰でも行きたい病院にアクセスができ、安価に治療が可能です。

欧米では、限られた医療しか受けられない人が現在も大勢います。日本が誇るこの素晴らしい制度も今年で63年。経済が疲弊し続ける中、危うい局面にきています。

しかし、保険証を持っていないくても70歳まで生きられる人もいるのだ……報道を聞き、僕は妙な感慨に浸っています。

1970年代、新左翼過激派として世間を騒がせた、東アジア反

342 桐島聡容疑者を名乗る男



桐島聡容疑者を名乗った男(知人提供)

突然の自白は自分のためか

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療と音楽情報を発信する傍ら、きどき音楽ライブも。

日武装戦線。同派による「連続企業爆破事件」で重要指名手配されていたメンバーの一人、桐島聡容疑者とみられる男が1月29日に神奈川県鎌倉市内の病院で死去しました。

享年70。死因は、胃がんとのこと。

捜査関係者によれば、男は道で行き倒れていたところを病院に搬送されてそのまま入院。やせ細っており、「買物に行く途中で動けなくなった」と病院で語ったそうです。保険証を使わず、当初は「ウチダヒロシ」という偽名を名乗っていました。

しかし1月25日に自分は桐島聡であると突然話したため、神奈川県警から連絡を受けた警視庁公安部の捜査員が身柄を確保。彼は1年以上前からがんを患い、自費診療で通院していたとのこととわかりました。しかし、自費診療でアクセスしたとしても、医療機関からは保険証の提示は求められないはず。男は、保険証を「失くした」「忘れた」とごまかし続けていたかも知れません。また、がんの手術や抗がん剤、放射線治療を自費で受けながら、数百万円は請求されるはずですから、男は、がんを診断されても一連の治療は拒否していた可能性があります。

逆に言えば、死ぬ数日前までは入院もせずに普通に暮らしていたということ。がん放置療法です。

実は多くのがんの人は、死の1カ月前くらいまでは日常生活を送ることが出来ます。食事や歩行がいよいよ困難になるのは死の1〜2週間前のことが多い。

逃亡50年の人生。偽りの名で恋も酒も、音楽も味わっていました。しかし、「最期は本名で迎えたい」と突然の自白。実名を吐露したのは警察のため？ 被害者のため？ 仲間のため？ 家族のため？ その動機はもう闇の中です。僕はどれも違うと思います。

ただ単に、自分のため。「桐島聡」という人生を生きたのだという実感が、最期の最期にどうしても欲しかったのではないのでしょうか。